

悪役を演ずる人々があるという解釈

——「我々は何をしにこの世に生まれてきたのか」補遺——

Greatchain

2017/07/19

今、この世界に生きていて、ものを知ろうとも考えようもしない人は別として、何か不思議な、超越的な力が働いているように感ずる人は、かなりいるのではないだろうか。私がよく見るサイトの論文でも、「なぜ、これほどの犯罪が許されているのだろう」という論調が多い。考えられない、文字通りの不思議があまりにも多すぎる。前回の、“ビルディング7”爆破の実行責任者の告白でも、こんなことがあった上は、すぐにも、メディアの無視できない蜂起か革命が起こると思ったのに、今日まで何も起こっていないのはなぜだ、と言っている。暗殺を怖れている（実際多数の人が暗殺された）とは言うものの、限度を超えた場合、そんなことを人々は怖れないはずである。

私はここで、この終末期の悪、これ以上墮ちることのできない極限的なこの悪は、ある程度長続きすることを許されている、むしろ長続きしなければならない、という仮説を取る。そうでなければ悪が十分に機能を果たすことができないからだ。こういうことを言うと、非宗教的な立場の人々は嗤うだろう。しかし私はそれは取らない。少し前に載せた「我々は何をしにこの世に生まれてきたのか」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170625.pdf> の Hidden Hand と呼ばれる、イルミナティ最高の哲学者と目される人の、最も重要と思われる言葉は次の部分である——

HH: (我々が徹底的な悪を行う) 理由は、それが、**我々がこのゲームで演ずることを約束した役割**だからです。このゲームに“勝つ”ためには(あるいはもっと正確に言えば、成功するためには、我々は可能な限り「ネガティブな極性」を持たねばなりません。極端な形の「自己への奉仕」です。暴力、戦争、憎しみ、貪欲、支配、奴隷化、民族抹殺、拷問、道徳的墮落、売春、麻薬、これらすべてと、もっと多くのことが、我々の目的に奉仕しているのです——このゲームでは。我々とあなた方の、このゲームの違いは、**我々は自分が“演じている”ことを知っていることです。**

(<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/161010.pdf> p.7)

極端な形の「自己への奉仕」としてここに上げられている項目を、つぶさに眺めるならば、

あたかも現在のアメリカ深層国家は、これを見て忠実に実行しているように見えるではないか！ あえてここにはない物を探せば、嘘と騙しだが、それはこれらの悪徳の手段である。

元 CIA エージェントの告白によれば、ビルディング7の崩落の原因の公式説明は、ツインタワーの火災の浮遊物の飛火によるもの、であるらしい。これでは反論する気にもならない。私は前から、彼らの態度の根本に、「人を食う」**愚弄**ということがあると指摘しているが、これはその一例である。問題は我々が、その愚弄にお返しさえできないことである。相手がそのように出れば、我々もそのように返さねばならない。相手が笑劇を**演ずる**なら、こちらも演じ返さねばならない。少しでもこれを捧腹絶倒物語として書いた新聞があったか？ 漫才のネタにした漫才師がいたか？

9・11 そのものと、それが原因で引き起こされた現在までの一連の惨劇は、厳粛に受け止めなければならない。そしてそこには、何らかの意図（意味）があると考えべきであり、意図が感じ取れるように意図されていると思われる。常識をはるかに超えた“狂気の沙汰”が世界を支配している。（ジョン・レノンが、我々は狂人どもに支配されていると言ったが、その通りになった。）これほどの狂気には、何らかの意味があると考えねばならない。それは、我々に与えられた（HH がいう）「触媒」——**意識革命の触媒**——でなければならない。**今までのパラダイムの使用期限はもう切れた**、このままでは生きていけないという信号でなければならない。それに気づかない間は、いつまでたっても苦しみは続くと考えられる。

あの“WTC7火の粉原因説”は更に拡張され、今、ワシントン政府では、ますます呆れるようなことが、正常なことのように論じられ、かつ報道されている。全く証拠なしのプーチンやアサド悪魔説や、トランプ逆賊説など。そしてそれを批判する者に対する、無視や“フェイク・ニュース”扱い、“プーチンの手先”呼ばわりである。

一例をあげるなら、国連米大使のニッキ・ヘイリーという女性が、シリアが4月初めに、化学兵器を使用したといわれる事件で、国連安保理事会が開かれたとき、「自国民を平気で殺すようなアサドを許すことはできない、それを支援するロシアもイランも許せない」という意味のことを、写真を示しながら堂々と述べ立てた。彼女自身も、おそらく大半の出席者も、それは完全なウソか、非常に疑わしい主張だと思っていたはずである。悪びれも気後れもしないヘイリーの態度は、あのWTC7の解体と同じく、「お見事」というほかはない。彼女の前任者はサマンサ・パワーという女性も、シリアについて堂々とウソをつくだけでなく、逆に攻撃に出るので、ロシアのある女性報道官が、「あなた、そこまで言うなら、シリアへ来て自分の目で真実を確かめたらどうですか、旅費は私がもちますから」と言った。これは面白いので読んでいただきたい。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160920.pdf>（そのとき同席して抗弁した、ロシアのチュルキン国連大使は、その間もなく不審死をとげた！）

こうした米政府高官共通の異常さについて、Antonius Aquinas（偽名）という人はこう言った——

今、アメリカの国連大使になる人々には、ある種の性格と気質が求められている。そのうち最も重要なものは、猛々しい戦争屋、子供殺し、鉄面皮のウソつきであることだ。マデリン・オールブライトが、アメリカがイラクを流通閉鎖して、薬も医療手段もこの国に入らなくなり、その結果、推定 50 万人の子供たちが死んだことを、どう思うか訊ねられたとき、彼女は冷ややかに答えた——「それは非常に困難な選択だったとは思いますが。しかし支払われたものは、それだけの価値があったと思っています。」…

その短い国連大使の期間中に、ニッキ・ヘイリーは、こうした要求を全く見事に満たしている。彼女の最近のキチガイじみた演説は、シリア政府が再びガス攻撃を用意しているという、ホワイトハウスの奇怪なプレス・リリースの後を受けたもので、彼女はアサド大統領に、「もし実行されたら重い代価を払ってもらおう」と警告した。(SOTN: “The Warmongers Handpicked by Deep State”)

私のこの論考の目的は、これほどの集団狂気、集団犯罪は、意図されたもので、何か意味があると考えべきだということである。悪役を振られた人々がいるということである。これは彼らに罪がないという意味ではない。終末論的・摂理史的に考えるなら、そう考えざるを得ず、そう考えるのが最も賢明だということである。これほどのことは偶然ではない。たとえば、一晩中、交通事故の夢を見続けたという人の体験話がある。これはただの夢でなく、何かを警告する夢だと普通は考える。果たしてその人は翌朝、(軽いが) 事故を起こした。

これは、我々の生き方に革命を起こすべく、仕組まれた地球規模の演劇である。少なくとも Hidden Hand はそう言っている。何を警告する演劇か？ それは彼らを憎めという警告ではない。刑法に従って彼らを処罰すべきことは当然である。しかし、それ以上に我々に要求されている義務は、我々が、自分と彼らの間に本来の区別はなかった、我々“善人”の内部に彼らがいた、と悟ることによって、彼らを救い、彼らとともに自分も救われることである。そのようになることを、HH は「勝利」とか「成功」とか呼んでいる。

ドストエフスキーは、その最高傑作『カラマーゾフの兄弟』について、実は、あの末弟のアリョーシャを、後に大悪人に変貌させる構想を持っていた、と語ったそうである。「アベル型」の典型ともいえるべき、模範的な宗教信者のアリョーシャが、大悪人に変貌したら、普通の評価は「あの男には騙された、猫をかぶっていたのだ」となるであろう。しかし作者の狙いはそうではなからう。それは彼が人間的に成長するために(神に近づくために) 必要な過程だったかもしれない。その場合、アリョーシャは人間の一部分でなく、人類そのものを代表

することになる。ドストエフスキーに、Hidden Handのような「悪を通じてより高い境地へ」という動機を見ることは容易いと思う。「善悪を知る木」の実を食べ、あらゆる経験によって自分を高めていこうとする人間——そういう人間を彼は描こうとしたのかもしれない。